



第 54 号
2010 年 11 月 1 日
LET 九州・沖縄支部事務局発行
〒808-0135 北九州市若松区ひびきの 1-1
北九州市立大学 長加奈子研究室内
TEL 093-695-3249
E-mail: secretariat@jlet-ko.org
編集：柿元悦子・田上優子・事務局

雑感 — LET 名誉会長に就任して —

LET 名誉会長 木 下 正 義

2005年7月のLET全国理事会で選出されて2007年4月1日より2010年3月31日迄の4年間、第10代LET会長を大過なく務めさせて頂きました。従来、名誉会長は会長が在任の支部から支部長が、推薦し、理事会で決定して、総会の承認を経て決定されていました。しかし、今回からは、島谷支部長が竹内会長宛に「LET 名誉会長推薦書」を提出して、支部長連絡会で「会長在任期間の業績と活動実績の報告」をして、支部長連絡会で同意を得て、理事会に議案として挙げ、理事会の承認を経て、総会で承認得ることとなりました。

2010年度第1回支部長連絡会は7月4日(日)に関西学院大学梅田キャンパスKGハブスクエア大阪で開催されました。2010年3月29日(月)に本部引き継ぎ会を福岡大学でLET前事務局長の石井先生とLET会長竹内先生及びLET事務局長小山先生と小生と2時間に亘る事務引き継ぎを行いました。その折に、竹内会長から第1回支部長連絡会には、前会長と前事務局長は是非、オブザーバーとして参加して欲しいとの要請を受けました。

第1回支部長連絡会の審議事項2で、島谷支部長より、小生を事前に配布されていた参考資料に沿って、小生の会長在任期間中のLET会長としての活動実績が支部長連絡会で報告されました。竹内会長は小生のLET会長としての活動実績の中で、第3回World

CALL 2008(8月4日—8日、於：福岡国際会議場、西南学院大学及び福岡大学)で大会実行委員長を務め、大会は成功裡に終了。大会予算は当初3,000万円であったが、決算の会計収支報告では、300万円の黒字となり、各支部が大会前に事前の準備拠出金に応じて、各支部に黒字分が返金された功績を特に、称えてくれました。

2009年10月にLET第50周年記念誌の発行の委員会を立ち上げ、編集委員長に、野村和宏先生(神戸市外国語大学)を任命して、各支部より2名の編集委員からなる委員会を設立して、各支部のご協力により、「外国語教育メディア学会50年の歩み - LLA から LET そして未来へ -」(179頁、(株)金星堂出版、平成22年8月1日発行)は第50周年記念大会LET全国大会(8月3日—5日、於：横浜サイエンス・フロンティア高等学校)で、参加者全員に配布され、不参加者にも後日、支部事務局より送付されました。

LET会長の任期4年間はあっという間の期間でしたが、小生の在任期間に5年毎にしか開催されないWorldCALLを初めて日本で開催し、その実行委員長の職を各支部役員及び会員諸氏のご協力・ご支援により大会が盛会裡に終わったこと、世界より34ヶ国からの参加者あり、外国からの参加者との知己を得て、2009年8月のAILA大会(於：ドイツ・

エッセン大学) 参加の折は、WoldCALL2008の参加者から感謝と労いの言葉を頂きました。「外国語教育メディア学会50年の歩み - LLAから LET そして未来へ -」(外国語教育メディア学会編) の記念刊行誌の第1頁に拙稿「LET (旧 LLA) と歩んだ教師人生 - 想い残った大会を振り返って -」掲載して頂き、これも偶然にもこの時期に会長を在任期間であったこと等、会長期間中に思い出に残る大会や出版に遭遇したことに何かの縁を感じました。



(支部功労賞を受賞された木下先生と池浦先生)

LET 九州・沖縄支部の同志に感謝

池 浦 貞 彦

外国語教育メディア学会九州・沖縄支部が結成されて40年！感無量です。思えば60年ほど前に中学校の英語教諭として就職し、より良い教材や指導の方法を模索しながら一人で悩んでいる時、明るい希望を与えて頂いたのが LLA (現 LET) とそこに集まれる同志だったのです。この度はその学会から功労賞を頂き嬉しいというよりは恐縮しながら「感謝状は私が LET 学会と同志の皆さんにお贈りすべきものです」と心の中で叫んでいます。

戦後10年余りの間に日本は産業や経済界を中心に国際化が急激に進み、その流れが英語教育界にも大きな影響を及ぼし読む、書くだけでなく、聴く、話す能力が重視されるようになりました。然し英語の母語話者を教師として雇う経済力は無く、日本人英語教師の再教育や録音機に頼るしか方法はありません。蓄音機に勝るテープレコーダーが1950年代に開発されて英語教育の方法は大きく改善されました。

教育機器の活用に強い関心を持ち始めていた1958年に米国留学の機会を得て、ミシガン大学では基礎になる英語音声学や音素論及び

構造言語学などを学ぶと共に既に完備されていた LL 教室を用いて英語音声を効果的に指導するための理論や方法を学びました。更に同じような興味をお持ちの金田正也先生と知り合う機会を得て帰国後も交流を続け、週末にはよく神戸へ出向いて同志数名の研修会に参加しました。このような動きが関東地方にもあって遂に1961年 LLA が発足したのです。

その頃九州では LL 設備を持っている学校は少なく、私が勤務していた学校では火災で失った校舎を新築する動きの中で教育内容の改善充実にも配慮がなされ簡易ながらも LL 教室を設置する提案が採用されました。要領よく使うだけでなく常に研究課題を持って教材を準備したり指導の方法を工夫したりして、その結果を LLA で発表しては同志の意見を頂いて更なる改善を図るように努力しました。1964年同志社女子大学で開催された LLA 全国大会で研究発表をした時泉マス子先生と板倉武子先生にお会いして早速3人で研究会を持ち始めました。やがて私が福岡教育大学へ転勤したので週1日とれる研修日を同じ曜日にして毎週集まって研究活動に熱中

しました。その成果は学会活動の中で発表したり論文に纏めたりする一方 LL 用英語教材として 2 冊、英語音声学専門書として 1 冊出版することができました。更に私が九州・沖縄支部長に選ばれた際は、お 2 人が副支部長として有難い支援をしてくださり、親交は今でも続いて「吾が人生の宝：3 I 会」となっています。

この 3 I 会がきっかけとなって関西や関東に出向かなくても九州の身近な場所で研修会を持つ動きが強くなり、遂に 1970 年九州・沖縄支部の誕生に至りました。私は音声学にも興味を持っていたので口腔関係の実験設備が整っている福岡歯科大学の大薮勉先生と LL 教室が設置されている近畿大学九州工学部の吉永光明先生、それに九州工業大学の米国人講師 Richard L. Dusek 先生と一緒に実験音声学の立場から主に日・英語音声の比較研究を深めました。LLA でも再三研究発表を行いました。少し専門的過ぎる内容の場合は音声学世界会議や世界応用言語学会で発表し夫々の論文集に採用されました。

中学校や高等学校の先生達との研究活動も盛んに行い 1969 年福岡中央高等学校で視聴覚

教育合同全国大会を開催した際は服部辰夫先生、井上史郎先生、川尻徳先生達の御活躍が有難い原動力になりました。更に北九州市を中心に LL 教室を設置する中学校が増えたことや高等学校入学試験に聴解力試験を導入する際の推進力になったことは間違いありません。

コンピュータをはじめ各種機器が次々に開発され外国語教育の分野にも急激な変革が起こり学会の名称も変わりましたが、LET がこの流れの正しい先導役を務めながら益々の発展を遂げますようにお祈りして受賞のお礼に代えさせていただきます。



(学会創設 50 周年記念顕彰を受けられた池浦先生)

学会賞を受賞して

水 野 邦太郎 (福岡県立大学)

このたび、LET 50 周年記念、そして、九州・沖縄支部 40 周年という記念の年に、九州・沖縄支部の支部長を長年務められました福岡大学の天津敦史先生よりご推薦をいただき、学会賞・教材開発賞を授かりました。そのような身に余る賞をいただきまして、心より深く感謝申し上げます。天津先生の支部長最後の年に、九州・沖縄支部から初めての学会賞をいただきまして、「関東から九州に来て本当

に良かった」と喜びを噛み締めております。

学会賞をいただきました Interactive Reading Community (IRC) という「洋書コミュニティ・システム」の開発には、14 年という年月がかけられています。その 14 年を振り返りますと、それは、私にとって 30 代の青春そのものでした。「青春」といえば、サムエル・ウルマンの「青春 (Youth)」という有名な詩、

“Youth is not a time of life- it is a state of mind. Nobody grows old by merely living a number of year, people grow old only by deserting their ideals.”

という一説を多くの方々が思い浮かべることと思います。

その詩とともに、私にとってこの14年間は、今は亡き国語学者の大野晋先生が書かれた次の一説が、心の奥底で支えとなってきました。大野先生の「青年と学問」という文章から、次の一説を引用させていただきたく存じます。

「学問とは、大きな事実の集積に耐えて、一人の人間が、その重圧の中で、膨大な事実を貫徹する、一つの筋道を見出していく作業です。それは、細かい事実を洩らさない心づかいと、多くの雑然たる事実に覆われている論理を見抜く、透明な精神の活動とによって成り立つものですが、その事実を集めたり、あるいは推理を働かせたりする作業は、ただ、風が吹いてきて木の葉がたまった、というように出来上がるものではないのです。やっぱり、一人の人間がいて、人を好きになったり、きらいになったり、あるいは、お金がなくて困ったり、あるいは国を救いたいと願っている、一個の人間のすることです。

学問とは、そういう人間が、青年期に自分に対して、荷物として課したものを運びきろうとして、努力を重ねて成し遂げることであり、あるいはまた、青年期に、自分の中に、傷として受けたことを癒そうとし、あるいは、傷を浄化しようとして、さまざまな形を与えて、世の中に現れて行く製作物であるのです。その傷が何であったか、願いが何であったかを理解しないと、学問が人間と結びついてこないでしょう。」

教育についても、同じことがいえるのでは

ないかと思います。それは、自分が20年前に大学の英語の授業で受けた、傷や願い、決意が、IRC という「洋書コミュニティ・システム」の開発において自分の心の奥底のほうで支えとなり、努力の形づけの基礎となっているからです。大学を卒業して20年がたち、英語の教師として、自分が学生るとき授業で受けた、傷や願い、決意を胸に、「自分が教わったように教えない」という志をもって、日々、教壇に立っておりますが、果たして自分の授業がどのように一人ひとりの学生にとって役立っているのか、自信が持てなくなるときがあります。そのようなとき、私の授業を受けている学生たちが、後になって「ああ良かった」、というような日がくるかもしれない、そういう時がきて欲しい、いつの日か授業で経験したことの意味に気づく時がくる、そう思いながら英語の教師という仕事を続けています。

そうした今の自分の気持ちを励ましてくれる、そして、私たち教師に元気を与えてくれるロングフェロウの詩、“The Arrow and the Song” を最後にご紹介させていただき、このたびの学会賞授与の感謝の気持ちにかえさせていただきたく存じます。

The Arrow and the Song

I shot an arrow into the air,

It fell to earth.

I knew not where;

For, so swiftly it flew,
the sight could not follow it in its flight.
I breathed a song into the air,

It fell to earth, I knew not where;

For who has sight so keen and strong
that it can follow the flight of a song.

Long, long afterward, in an oak

I found the arrow, still unbroke;

And the song from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.



(受賞された水野先生と山根先生 (関西支部))

LET 九州・沖縄支部40周年記念大会盛会のうちに無事終了

大会実行委員長 大 津 敦 史 (福岡大学)

2010年度 LET 九州・沖縄支部研究大会は、支部創立40周年目にあたり、「40周年記念大会」と銘打って、6月5日(土)に開催されました。会場は、長崎県佐世保市にあり、古き良きオランダの街並みをイメージしたボタニカルリゾート・ハウステンボスを選びました。九州一円のみならず全国各地からもご参加いただける様に、開会式の時間を午後からに設定しましたが、それが功を奏したのか、参加者総数は大会参加者の同伴者の方々まで含めると100名弱に達し、またその半数以上が園内で開催された懇親会にもご参加いただきました。

開会式では、第6代支部長に就任された島谷浩先生(熊本大学)が、今後の支部運営方針などについて“Small changes can make a big difference.”を目標に熱く語られました。まさに新生九州・沖縄支部にふさわしい順風満帆なる旅立ちに思えました。その後、九州・沖縄支部に対するこれまでの多大なる功勞に感謝の意を表すため、支部功勞賞が池浦貞彦名誉支部長(福岡教育大学名誉教授)と木下正義前 LET 会長(元福岡国際大学教授)に

贈呈されました。お二人にはこれまで個人的にも多くの面でご指導とご鞭撻を頂戴して来ました。ここに今一度心底より感謝申し上げます。

大会プログラムのトップを飾って、「CALL授業の展開 — その可能性を広げるために —」と題する特別講演が竹内理 LET 新会長(関西大学)よりありました。メディア進化の潮流とメディア利用教育の潮流と言語教育学の潮流という3つの潮流の交わるところに、あるべき CALL の将来像を予想するという内容でしたが、緻密な時間配分から聴衆を惹き付ける話しぶりまで、さすがと思わせる講演でした。

研究発表・実践報告では、福岡県と熊本県そして地元長崎県の先生方が中心となり、様々な側面から貴重な内容の発表がなされました。また、展示協賛企業12社のうち6社から企業プレゼンテーションを頂戴し、各社新商品の特徴が披露されました。最後のテーマ別セッションでは、ICTと関連させた観点から、多読指導、ESP、リメディアル教育の現状と今後の課題について有意義な議論を聞くことが

できました。

閉会式では、来年度の支部研究大会の開催校を代表して、田口純先生（筑紫女学園大学）より心温まるご挨拶を頂きました。

不肖ながら私が総司会を務めた懇親会は、バラの香が残るフォレストヴィラのすぐ傍に位置する森のレストラン「トロティネ」を会場に、53名もの方々のご参加を得ました。竹内会長と木下前会長のご挨拶の後、池浦名誉支部長のご発声で懇親会の幕が開きました。途中の抽選会では、展示協賛企業様はじめハウステンボス様と佐世保コンベンションビューロー様よりたくさんの記念品を抛出頂きました。ここに改めてお礼を申し述べたいと存じます。本当にありがとうございました。ここに掲載しました写真は、懇親会で仲良くグラスを交わす竹内会長と木下前会長と池浦名誉支部長そしてわれらが島谷支部長の面々です。

懇親会終了後の2次会には、何と30名近いの方々にお集まり頂き、時の過ぎるのも忘れて歓談できました。実に楽しい1日でした。

最後になりますが、2年間に渡る大会準備



（木下先生，池浦先生，竹内会長，島谷支部長）

期間中、常に私を支えてくださった実行委員の方々に心からお礼を申し述べたいと思います。島谷先生、ご協力ありがとうございました！竹野先生、事務局のお仕事お疲れ様でした！古村先生、今後ともどうぞよろしく！数日前まで40℃の高熱を出しながらも頑張ってくれた長先生、本当にありがとう！そして、大規模な大会ではいつも「縁の下の力持ち」を黙って演じ続けてくれた柴戸さん、心から感謝申し上げます！

LET50若手シンポジウムに参加して

荒 木 瑞 夫 （宮崎県立看護大学）

今年の LET 全国大会の最後に、シンポジウム「若手研究者が語るメディアと外国語教育の新たな共生の姿」が開催され、パネリストの1人として参加した。昨年は竹内理新会長（関西大学）の下、脳科学をテーマの1つとして行われた大会の最後に、ビッグネームの基調講演が催された。今年は若手の話を聞いてみようという、これまた斬新な発想による企画ではなかったかと思う。シンポジウムの前日には横浜のホテルで華やかな「LET50周年記念式典」が催され、歴史を振り返り、LET の来し方を見つめる企画が行われた。

しかし、学会プログラム全体は、この学会の先を見ようとする姿勢であふれ、LET が「若い」学会であることを示していたように思う。それは新しい人員がこの学会を盛り立てていると同時に、本学会が変化の激しい IT の変化とも深く関係しているためでもあるだろう。

コーディネータ・司会は会長の竹内理先生自身が務められ、山田政寛先生（金沢大学）、住政二郎先生（流通科学大学）、後藤一章先生（摂南大学）、そして私がパネリストを務めた。山田先生は、教育工学がご専門の研究

者で、外国語教育の前提に捉われない見通しのよい意見を展開された。教育工学の論文査読を多くされた経験から、外国語教育学の投稿に研究デザインや統計が弱いものが多く、論点が不明確なものが多いとコメントされた。社会的存在感という概念をめぐるご自身の教育の基礎研究は、先のコメントに反しない方法論的確さを備え、力強い説得力を持っていた。住先生は、社会文化的アプローチの立場から実践を全体的に捉えるという、魅力的ながら実証性の確保も難しい領域で、できる限り実証的な方法論で挑んでおられる。学習ログをデータ源とした興味深い研究を紹介された。後藤先生は、情報系の学部を出た後、大学院で言語学を専攻された方で、高い情報スキルを駆使して自然言語処理の観点から外国語教育にアプローチをされている。自然言語処理と外国語教育との関連を整理し分かり易く説明された。私はというと、数年来取り組んでいるオンライン異文化交流の実践の紹介を行った。ツールは目まぐるしく変化するが、インターネットによって教室に「相手」を持ちこむことで生まれる教育の可能性は必ずしも技術的な部分だけではないことと、それらの実践が教室単位で比較的容易にできることを強調したつもりである。

各パネリストの発表の後、お互いへのコメ

ントと共に、共同研究の可能性を話し合った点がとても興味深かった。教育現場は本来的に多面的であるため、より実践に関連づけようとするれば多面的なアプローチが必要となる。アプローチの組み合わせと共同研究の遂行には、旧来の発想に捉われない、ある意味での「若さ」が必要になるわけなのだと解釈した。

終始するどくかつバランスの取れたコメントを展開した山田先生が、外国語教育研究に散見される方法論のあやうさを「徒弟制の崩壊」とも関連付けていた。適確な指摘だと思う。だが、各人が多様な背景を持っていることは強みにもなり得るだろう。その重要な処方箋として、学会がリーダーシップをとって研究のスタンダードを示すことと、研究者間の横の連携を結びつけることがあるだろう。まず実践ありきの会員も多い外国語教育の分野では、学会が研究においても人間的な結びつきにおいても多次元的なトポスとして機能することが、この分野の発展を促すのだと思う。変化が多く現実的なニーズに左右される外国語教育の分野では、旧来型の「徒弟制」に大きく依存するディシプリンの継承は難しい。だからこそ、私たち会員それぞれがより「自律的に」学会に関わっていくことも大事だと感じた一日だった。

～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ 支部規定改定のお知らせ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊

LET 九州・沖縄支部長 島 谷 浩 (熊本大学)

第40回支部研究大会（支部設立40周年記念大会）当日に開催された支部総会において、支部研究活動の活性化と支部運営の円滑化のために、諸規定の改定が提案され承認されました。その中で、特に、支部の研究活動の活性化に関係する 1) 支部紀要執筆資格の改定と、2) 他支部会員の支部研究プロジェクトへの参加認可についてお知らせいたします。

1) 支部紀要の執筆資格改定について

従来は、支部紀要の執筆は、本支部会員に限られていました。しかし、他支部会員との共同研究が増えている現状に対応するために、「支部紀要編集・執筆規定」にある執筆資格を次のように改定いたしました。

支部紀要編集規定・執筆規定 [執筆資格]

新	九州・沖縄支部紀要の筆頭執筆者は外国語教育メディア学会九州・沖縄支部会員でなければならない。但し、共著者として他支部会員を執筆者の過半数を超えない範囲で加えることができる。
旧	九州・沖縄支部紀要執筆者は外国語教育メディア学会九州・沖縄支部会員でなければならない。

筆頭執筆者は本支部会員で、他支部会員は、執筆者の過半数を超えられませんが、他支部会員との共同研究の成果を支部紀要へ投稿することができるようになりました。

2) 支部研究プロジェクトでの他支部会員との共同研究について

支部研究プロジェクトは、本支部会員のみによって構成される研究グループを意味し、

他支部の会員が支部研究プロジェクトに参加することは想定されていませんでした。今回の規定改定により、他支部の会員を共同研究者として迎えて、支部研究プロジェクトへ応募することが可能となりました。

支部研究会応募規定

新	1. 本研究プロジェクトへの応募資格を有する者は、外国語教育メディア学会 (LET) 九州・沖縄支部の会員とする。但し、共同研究者として他支部の会員をプロジェクト全体の過半数を超えない範囲で含めることができる。
旧	1. 本研究プロジェクトへの応募資格を有する者は、外国語教育メディア学会 (LET) 九州・沖縄支部の会員とする。

支部研究プロジェクト研究計画書式

新	共同研究者（4名まで、但し他支部の会員をプロジェクト全体の過半数を超えない範囲で含めることができる）： Co-researcher(s) (Maximum of four. Over half of the project members must be LET Kyushu - Okinawa chapter members.)
旧	共同研究者（4名まで）： Co-researcher(s) (Maximum of Four)

支部諸規程は、4月に遡って改定され、すでに本年度の支部研究大会の発表者、支部研究プロジェクトにも適用されております。さらに、支部紀要執筆要項の一部が改訂され、原稿提出要領が新たに定められております。詳細は支部ホームページのメインメニューにある「会則＆入会手続き等」でご確認ください。

最後になりますが、本年度より支部研究プロジェクトが毎年募集されることになり、そ

の予算を反映した予算案が支部総会で承認されました。昨年度まで隔年募集であった支部研究プロジェクトが、毎年4月に新しいプロジェクトがスタートすることに変わったわけで、支部の共同研究活動がより活発になるこ

とを強く期待しております。支部研究プロジェクトの応募締切は、来年2月末日となっております。支部研究プロジェクト研究計画書式を、支部ホームページから入手し、ぜひ応募をご検討ください。

＊～＊～＊～＊～＊～事務局からのお知らせ～＊～＊～＊～＊～＊

【新会員】2010年6月1日以降（50音順）

<正会員> Robert Chartrand（久留米大学）

張あんな（東海大学福岡短期大学）

<学生会員> 樋口高子（メリーランド大学）

Jason Morgan（熊本学園大学）

【2010年度秋季学術講演会】

以下の日程で2010年度秋季学術講演会が開催されます。懇親会に参加をご希望の方は、11月6日（土）までに事務局までご連絡ください。なお今回の開催場所は東キャンパスとなっておりますので、ご注意ください。

日時：2010年11月13日（土）

15：00～17：00

会場：西南学院大学 東キャンパス
大学院棟大学院大ホール

<http://www.seinan-gu.ac.jp/campusmap.html>

講師：Dr. Coxhead, Averil

(Senior Lecturer, School of Linguistics and applied language studies, humanities and social sciences, Victoria University of Wellington, New Zealand)

演題：Working with collocations, phrases and word lists: Connecting multi-word units, English language classrooms, and the Academic Word List

参加費：無料

懇親会：御膳屋 菴（いおり）

<http://www.ozenya.com/iori.html>

地下鉄2号線中洲川端駅 川端口7番出口

会費：4,500円

懇親会申込先：LET九州・沖縄支部 事務局
secretariat@j-let-ko.org

【第41回支部大会】

第41回支部大会が以下の日程で開催されます。

日時：2011年6月4日（土）

会場：筑紫女学園大学（福岡県太宰府市）

大会テーマ：（仮）「こうすればできる
小学校外国語活動」

口頭発表受付：2011年1月11日（火）から
2011年2月18日（金）（支部HPにて受付）

【第51回全国大会】

第51回 LET 全国大会が以下の日程で開催されます。

日時：2011年8月6日（土）から8日（月）

会場：名古屋学院大学白鳥キャンパス

大会テーマ：（仮）「外国語教育における
自律性と継続性」

【支部研究プロジェクト】

これまで隔年募集でした支部研究プロジェクトが、今年度から毎年応募できるようになりました。今年度の締め切りは2011年2月末日です。多くのプロジェクトの応募をお待ち申し上げます。詳細につきましては、支部ホームページの「会則&入会手続き等」からプロジェクトに関する規定をご覧ください。

【LET ホームページ】

<LET 本部> <http://www.j-let.org>

<LET 九州・沖縄支部> <http://www.j-let-ko.org/>

【LET 九州・沖縄支部事務局】

〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1

北九州市立大学 長 加奈子研究室内